

サバルタン・スタディーズと南アジア人類学

著者	田辺 明生
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	33
号	3
ページ	329-358
発行年	2009-02-27
URL	http://doi.org/10.15021/00003930

サバルタン・スタディーズと南アジア人類学

田 辺 明 生*

Subaltern Studies and South Asian Anthropology

Akio Tanabe

This article discusses the relationships between Subaltern Studies and South Asian anthropology. After surveying the mutual influences between the two, the article argues the following: 1) the field of historical anthropology that pays attention to the history and structure of workings of power, subject-formation and the role of agency, has the potentiality of fruitfully combining anthropological knowledge and inspirations from Subaltern Studies; 2) there is a need to pay attention to the role of cultural re-imagination by the subalterns in the contemporary process of political group formation; 3) in addition to understanding the social structure and/or moments of change represented by revolts, it is necessary to consider the dynamics of social “becoming”, that is, the process of transformation of social relationships and patterns through every day events. Lastly, the article argues that care should be taken to note the change in the semantics of the term ‘subaltern’ under the present day globalization. Attempts to locate the presence of the ‘subaltern’ in the present situation can function to identify a group as a holder of particular resources—e.g. genetic resources or medicinal knowledge—instead of shedding light on alternative viewpoints. This would only work to enrol the subalterns in global capitalism instead of appreciating and respecting their way of life. We need to be extremely careful about studying the subaltern under such conditions.

*京都大学人文科学研究所

Key Words : subaltern studies, anthropology, history, agency, social change

キーワード : サバルタン研究, 人類学, 歴史, 行為主体性 (エージェンシー), 社会変化

はじめに	人類学をめぐる諸論点
1 サバルタン・スタディーズの形成と展開	2.1 民衆の主体構築の歴史と構造をいかにとらえるか
1.1 サバルタン・スタディーズ・シリーズの概要	2.2 「人民＝民衆の国家」形成における文化的想像力の役割について
1.2 初期サバルタン・スタディーズ	2.3 日常的秩序の変容——主体と経験の変化をいかに描けるか
1.3 後期サバルタン・スタディーズの変容	おわりに——グローバルゼーションとサバルタン
2 サバルタン・スタディーズと南アジア	

はじめに

本論は、サバルタン・スタディーズと南アジア人類学の関係性について論ずるものである。「サバルタン」とは下層民（非エリート民衆）のことを指し、「サバルタン・スタディーズ」とは、従来のエリート中心史観に対して、インドの歴史と社会をサバルタンの主体性に着目して描き直そうとする学術運動とその成果のことを指す（文末リスト参照）。ただし近年ではこれらの用語はインド外にも適用されている。なおこれらの言葉の意味については、後により詳しく論ずる。

ここでいう「南アジア人類学」(South Asian Anthropology)は、南アジアにおける人類学ではなく、南アジアについての人類学を指す。本論ではこの言葉を、南アジアに関する人類学的・社会学的研究の総称として用いる。ちなみにインド、パキスタン、バングラデシュにおいて「人類学」という言葉は、「トライブ」研究を指すことが多い。日本や欧米の南アジア人類学が対象とするいわゆるヒンドゥーやムスリムの社会は、南アジア諸国では社会学が主に取り扱う。しかしそれらのインド人社会学者の研究も、ここでは「南アジア人類学」に含める。南アジア人類学においては、歴史人類学の潮流が盛んであり、最近では南アジアに関わる歴史学や政治学の分野でもフィールドワークが盛んに行われている。南アジア研究の領域では、人類学、社会学、歴史学、政治学の相互参照的な研究や相互乗り入れ的な研究が比較的活発に進められているといえよう。

本論では、まず前半においてサバルタン・スタディーズがどのように展開してきたのかを概観し、それが人類学の方法論とどのように交差してきたかを検討する。つい

で、後半では、サバルタン・スタディーズと南アジア人類学の交流のなかで、どのような論点の問題となってきたのかについて論じたい。

1 サバルタン・スタディーズの形成と展開

1.1 サバルタン・スタディーズ・シリーズの概要

サバルタン・スタディーズは、2007年現在までに12巻が出版されている（文末リスト参照）。最初の6巻は、このサバルタン・スタディーズの中心的メンバーであったラナジット・グハ（ベンガル語読みだと、ロノジット・グハ）（Ranjit Guha）が編集したものであり、1982年から1989年までのあいだにニューデリーのオクスフォード大学出版会から出版された。7巻から10巻では編者が変わり、グハとともにサバルタン・スタディーズ・グループの中心人物であった人々——パルタ・チャタジー（パルト・チャタジ）（Partha Chatterjee）、デイヴィッド・ハーディマン（David Hardiman）、ディペッシュ・チャクラバルティ（ディベッシュ・チョクロボルティ）（Dipesh Chakrabarty）たち——が編集した。11巻は出版社がニューヨークのコロンビア大学出版会（インドではパーマネント・ブラックでの出版¹⁾）に変わり、12巻の出版先は再びニューデリーになったがオクスフォード大学出版会ではなくパーマネント・ブラックから出版されるというように、その編集・出版体制も大きく変容している。さらに、1巻から10巻まではWriting on South Asian History and Societyという副題がついていたが、11巻はCommunity, Gender and Violence、12巻はMuslims, Dalits and the Fabrications of Historyというようにテーマ別の副題になっている。そうなることサバルタン・スタディーズという一貫した主張があるものというよりは、テーマ別の本が出版される叢書に近いものになっているといえよう²⁾。

次はどうしてサバルタン・スタディーズというシリーズが出版されるようになったのか、その経緯についてインド研究の文脈において論じたい。

1.2 初期サバルタン・スタディーズ

1.2.1 サバルタン・スタディーズの生まれた歴史的背景

インドにおいては、1947年の独立以降、民主主義・近代化・ナショナリズムが国是となっていたが、1960年代後半からは、対抗政党が充実して実質的な政治的選択が増え、実際にいわゆる下層民と呼ばれるような低カースト、部族民、女性の投票率

が増えるなど、民衆の政治参加が進んでいった (Yadav 2000)。そして社会運動、「ナクサライト」運動 (実力行使を伴うマルクス=マオイスト的運動)、女性の地位拡大運動、農民運動、労働運動などが拡大していった。

この1960年代において、インド独立後の政治体制は大きく変わりつつあった。それまではインド国民会議派が、ナショナル、リージョナル、ローカルのさまざまなレベルで多元的な集団のあいだのコンセンサスを成立させながら、国家レベルの政治を全体として運営していくといういわゆる「国民会議派体制」(congress system)を成立させていた (Kothari 1964, 1974, 1994)。しかし1960年代後半頃からは、先ほど触れたような政治運動・社会運動が活発になっていき、国民会議派体制の維持は難しくなっていた。そのなかで、インディラ・ガンディーは中央集権化の動きを進め、他方で、ポピュリスト的な政治を展開して民衆からの直接的な支持を確保しようとしていく。ここで特に1970年代からは、政府が民衆に対して資源分配をするとともにその見返りとして票を求めるといった形のバラマキ政治が広がった。こうした国家のポピュリスト的な集権化が進むと同時に、他方において、民衆の手に決定権をもたらそうとする社会民主主義的な社会運動もさらに活発化した。それは国家政治にほとんど反映されることはなかった。

そのような状況において、グハはどうして民衆や人民——彼は *people* と *subaltern classes* という言葉を同義的に使う (Guha 1982a: 8)——の政治が、国家政治において実現されないのだろうかという問いをもつにいたったのであった。さらに、歴史学の立場から「民衆の政治」(*politics of the people*)とはいかなるものであったのかを記述する試みをなす。そして民衆の政治について記述と分析をするために、従来のエリート主義的歴史叙述 (*elitist historiography*) に対する批判を行ったのである。

エリート主義的歴史叙述においては、国家の統治制度に関わることを政治としてとらえ、植民地支配者と現地のエリート支配集団との政治的なやりとりのみをインド近代史の流れと考える。いわゆる植民地主義的歴史叙述 (*colonialist historiography*) においては、インドが独立にいたる過程は、英国植民地政府がインドに民主制と合理性の理念や科学的文明をもたらした近代化の歴史として語られる。ここでは英国政府とその教導を受け取った現地エリートが主役である。また民族主義的歴史叙述 (*nationalist historiography*) においては、M. K. ガンディーやネルーらの国民会議派のリーダーが上から民衆を指導して率いることにより、インドは独立を勝ち取ったと語られる。そこにおいて民衆は、国民会議派リーダーによって動員された客体的な存在にしか過ぎない。それに対して、サバルタン・スタディーズは民衆の主体性に注目

する。グハは、サバルタン民衆は独自の政治領域を有していたと論じる。そして、これまでの歴史叙述に欠けていた「民衆の政治」こそを記述しなければならないという。こうしたスタンスが、サバルタン・スタディーズの出発点であった。

1.2.2 国民による自己実現の歴史的失敗

サバルタンには独自の政治領域があるということは、彼らが主体として国民国家を実現したということの意味するわけではない。現実としては、1970年代にいたるまで、サバルタン民衆の多くは国家政治から離れたところにいたわけであり、民衆の多くは独立国家の主権者たるはずの「国民」とはなれなかったわけである。こうした視点からグハは、サバルタン・スタディーズは「国民による自己実現の歴史的失敗」の研究であると説明している（Guha 1982a: 7）。

後に、バルタ・チャタジーやスディプタ・カヴィラージは、国民による自己実現の歴史的失敗をインドにおける「受動的革命」（passive revolution）と性格づける³⁾。それは、独立時の権力移譲において、植民地国家の後継者となった独立国家が、実効的な統治のために旧支配層に依存し続け、民衆が主導的な役割を獲得することができなかったことを指す（Chatterjee 1986: 30; Kaviraj 1988; Corbridge and Harriss 2000: 38）。

1.2.3 「民衆＝サバルタン」というカテゴリーの設定

エリート主義的歴史叙述およびそれにつながるエリート・ナショナリズムに対抗するために、サバルタン・スタディーズ・グループは、本来のネーションを構成するはずだった「民衆＝サバルタン」というカテゴリーを設定した。そして、民族運動におけるサバルタン固有の領域を描写しようとする。

グハは、「サバルタン」とは「南アジア史における従属という一般的な属性」を表す言葉であるという（Guha 1982b: vii）。彼が古典的なマルクス主義者と違うところは、サバルタンを生産関係によって規定されるような階級のみでは定義しないところである。そして、階級だけでなく、カースト、年齢、ジェンダー、地位、あるいはその他のどういった軸であれ、下位（inferior）におかれるもの、従属させられるものをサバルタンと定義づける（Guha 1982b: vii）。

さらにグハは、サバルタンというカテゴリーは、「エリートと描写されるすべての人たちと、インドの人々全体との人口的な差異」において特徴づけられると論じる（Guha 1982a: 8）。サバルタンが「差異」によって特徴づけられるということは重要である。グハは、グラムシの理論を基盤にしているため、サバルタンはエリートとの

関係においてのみ定義可能であるということをはっきりと認識しており、サバルタンとは実体的に存在する集団ではなく、常に関係的によって定義されるカテゴリーでしかない、ここで表明しているわけだ。しかし、他方において、サバルタンという言葉は実体的なイメージをもって使われることがしばしばあり、グハの議論のなかでも、実際の諸社会集団を、エリート、サバルタン、その中間的存在と分けようとするような説明を行っている箇所もある（Guha 1982a: 8）⁴⁾。

1.2.4 従来のインド歴史学とサバルタン・スタディーズ

こうしたサバルタン・スタディーズのプロジェクトを、インド史研究の文脈のなかに位置づけるとすれば、それは、当時の歴史学の主流であったナショナリスト的な歴史記述、いわゆるケンブリッジ学派的な歴史研究、さらに古典的なマルクス主義的な研究に対する批判であったといえよう⁵⁾。

ケンブリッジ学派は、いわゆる植民地主義的歴史観にもとづく。それは、現地のローカルリーダーたちの富と権力の追求と派閥闘争の側面を強調するポリティカル・エコノミー中心の議論である。そして、植民地期のインドにおける政治活動は、インドの人たちがいわば合理的な行為主体として富と権力を求めて行ったものであり、ナショナリズム的・反帝国主義運動ではなかったと主張する。そこでは、ナショナリズムを含む価値や意味の側面が軽視されており、またローカルリーダー以外の一般民衆についてはほとんど無視されている。

サバルタン・スタディーズ・グループのプロジェクトは、こうした植民地主義的歴史叙述だけでなく、エリートを民族運動における中心的な主体として描くナショナリスト的歴史叙述、そしてマルクス主義的歴史叙述にも批判の目を向ける。そして、エリートではなくサバルタンに、また経済的階級だけではなく意味や価値のレベルに注目しようとするのである。つまり、サバルタン・スタディーズは、インド近代史においてサバルタン民衆が果たした役割に着目し、その価値や文化を明らかにしようとする。エリートとは異なる独自の「サバルタン意識」を民衆がもっているとするのである。こうした価値や文化の視点を導入するところが、マルクス主義やケンブリッジ学派と異なる点であり、またサバルタンの視点を重要視するところが、ナショナリスト的歴史叙述とも違う点である。サバルタン・スタディーズは、民族運動のなかで多くの農民反乱や労働運動が起きたことに注目し、その重要性に焦点をあてていく。

それでは、どのような価値や文化がサバルタン意識やサバルタンの主体性を形成していると考えられるのだろうか？その探求には明らかに人類学的方法論が反映され

ている。

1.2.5 人類学的な「意味の体系」とサバルタン・スタディーズ

グハは、マルクスとグラムシを基礎におきながら、人類学的な「心性構造」(structure of mentality)や「意味の体系」の枠組みをとり入れ、サバルタン意識(心性、価値、宗教性の構造)を明らかにしようとした。たとえば、彼は農民反乱を理解するために、宗教、神話、儀礼から、農民の心性構造を抽出しようとする(Guha 1983)。グハは、農民反乱に関する著書のなかで、農民の心性構造のありかたについて箇条書き的に描写する。そこでは、「民族主義や社会主義の政治が田舎に浸透する以前の『純粹』状態」においてサバルタン意識を抽出しようとするのだ(Guha 1983: 13)。

現在、われわれがそれを読むと、なぜ歴史学者が農民の心性についてそのような非常に静態的な描写をするのだろうかという不思議な印象を抱かざるをえない。しかし、当時のグハにとっては、それは国民会議派のエリートあるいは合理的な富と権力の追求者とは異なる価値や行為主体性^{エージェンシー}をもった農民の心性を描こうとするいわば(バーミンガム・スクール的な意味での)人類学的なカルチュラル・スタディーズの試みであったといえよう。サバルタン・スタディーズの最初の巻は1982年に出版されたが、当時は人類学においても、「現地人の視点」(native's point of view)からみた意味の体系への着目が重要視されていた時期でもあった。当時のグハの著作は、まさに農民の視点から、植民地政府による抑圧がどのように見え、どのような価値にもとづいて反乱を起こしたのかに注目し、農民における意味の体系を描こうとしたのである。

また、シャヒーード・アミンは、非協力運動時に、M. K. ガーンディーについてのどのような「神話」が民衆のあいだで語られ、サバルタン農民が自らの観点からガーンディー像をどのように構築したかに注目する(Amin 1984)。農民たちのうわさのなかでは、ガーンディーはさまざまな奇跡を起こす力をもつとされたが、これは、北インドにおける民衆信仰にもとづくものであった。また農民たちは、ガーンディーの命令には絶対的な服従が必要だとしたのであるが、その命令の中身については、自らの内在的な要求に従って独自の解釈を施した。農民たちは、ガーンディーのswadeshi(国産品愛用運動)の指令に従わない人たち——たとえば西洋から輸入した布などを売っている店——に対し、暴力的な行動を起こした。しかし、これは非暴力運動を推進しようとしていたガーンディー自身の命令であるよりも、実際には農民自身が正しいと考えたことを行ったのである。つまりガーンディーや国民会議派の出すメッセージを、農民の側は自分の意味体系や心性構造において解釈し直したのだと、アミン

は指摘する。

サバルタン・スタディーズにおいて、サバルタン意識は宗教性へと還元される傾向があった。たとえばチャタジーは、「宗教は、存在論、認識論、そして政治倫理を含むような倫理の実践的規則をもたらす。サバルタンが政治的に行動するとき、それぞれの行為の象徴的意味——その意義と重要性——は宗教的な見地から理解されねばならない」という（Chatterjee 1982: 32）。つまり、サバルタンの宗教を理解することで、彼らの政治的行為の意味と価値は理解できるというのである⁶⁾。ここでチャタジーのいう宗教は、象徴体系あるいは意味の体系に還元されている。

またデイヴィッド・ハーディマンは、西インドにおけるデーヴィー（女神）運動において、トライブ農民が女神の託宣として菜食や清潔を受け入れることを論じた（Hardiman 1984, 1987）。これも宗教と政治運動のつながりに注目した研究例であるといえよう。

初期のサバルタン・スタディーズの論考では、このようにサバルタン独自の意味と価値の体系を描出することに力を注いでいる。サバルタンを政治経済的合理性でも前近代的非合理性でもない、いわばレヴィ＝ストロース的な神話的合理性をもつ存在、あるいは、ギアツ的な固有の意味体系をもつ存在としてとらえるのである。しかし、それはレヴィ＝ストロースやギアツが人類学において批判されたのと同じような弱点をもつ。つまりそこには、非歴史的な抽象化と構造化の傾向がある。そして、外部との接触前の「純粹状態」における農民の心性構造を叙述しようとするのだが、それはまるで人類学者が、世界システムに包摂される前の本当の「高貴な野蛮人」を探そうとした試みに似ている。

さらに問題は、サバルタンという他者を、一貫した表象代理が可能な存在として描くことである。サバルタンは、本来はエリートとのさまざまな軸における差異において現れるはずだったものが、何々トライブあるいは何々地方の農民の宗教や価値の体系という形で、まるである集団の全員が内部的に一体であり、同じような価値と意味の体系を共有しているかのように論じられた。また、サバルタン意識はまるで自律的に存在したかのように扱われる傾向性がある。サバルタンがある特定の意味の体系をもっていると論じることによって、サバルタンの自律性が前提とされてしまうのである。

もうひとつの問題は、エリートに属すると言わざるをえない研究者が、サバルタンの視点を表象代理できるとすることである。ここにおいては、当時の人類学のスタンスを初期のサバルタンも共有している。そこでは表象代理の対象であるサバルタン文

化が、研究者主体から切り離され客体化されてしまう。しかし、文化は常に外部とのつながりや相互関係のネットワーク——それは権力性を帯びたものでもある——のなかで構築されるのであり、そうしたつながりのネットワークは内部にも広がるものである。研究者もこうしたネットワークの一部をなしているといっただろう。

サバルタンの実体化の傾向があるとはいえ、グハ自身は、理念的にはサバルタンに属する人々が、エリートのために行為する可能性があることを指摘しており（Guha 1983: 8）、エリートとサバルタンを固定的に分離していたわけではない。また、サバルタン・スタディーズの個々の論考のなかには、きちんとコンテクストを描くことで、単に集団の価値体系を描いたものではないものもたくさんある。方法論的に明示化されてはいないものの、つながりのネットワークをきちんと描いているものもある。

たとえば、先に触れたハーディマンは、エリート・ナショナリズムおよびそのヘゲモニー的言説の作用と、下からの対応・流用・変容の実践について描いている（Hardiman 1984, 1987）。彼は、西インドのデーヴィー（女神）運動をとりあげ、トライブ農民における、1910–1920年代のインドでのガンディー主義の広がりという政治状況と、既存の宗教実践との創造的媒介の事例について論ずる。デーヴィー運動においては、トライブ農民は女神の託宣として菜食や清潔などの実践を受け入れた。女神が憑依し、「お前たちは肉を食べてはならない、そして体を清潔にするように」と告げたのである。こうした動きは、従来の研究では「サンスクリット化」（sanskritization）の現象として理解されていた。つまり、カースト・ヒエラルヒーにおいて下位にあるものがバラモニックな慣習を採用することによって、地位上昇を目指す運動であると解釈されたのである。しかしハーディマンは、トライブ農民によるこうした動きはサンスクリット化の現象であるというよりも、むしろ当時のガンディー主義的運動を、トライブの側が解釈し実践したものであると指摘したのであった。ガンディーが肉食をやめろという指令を出したわけではない。だがトライブ農民のほうで、ガンディーは肉食をしない聖人であるということから、自分たちの視点からガンディー主義を反肉食の運動として解釈したのであった。そしてガンディー主義に対するそうした解釈を自分たちの女神のメッセージとしてとり入れることによって、自らのアイデンティティを保ちつつ、同時にガンディー主義的運動と連携していくことを可能にしたわけである。

初期のサバルタン・スタディーズは、明示的に自覚された方法論としてはややナイーブなところがあったことは否定できないだろう。しかし、個々の論考をみると、こうした批判をものともしない非常に優れた分析があった。それは当時の人類学も注

目していたような、現地人の視点からの象徴体系を描写するにとどまらず、それが外部との相互関係という具体的な歴史的コンテクストにおいてどのように構築されていたかを描写していたという点で、非自覚的ではあったが、方法論的にも非常に先端的な部分を含んでいたのである。それによって、それまでの歴史学や人類学になかったような歴史と文化の描写が可能となっており、それがサバルタン・スタディーズの論述を非常に魅力的なものにしたのである。

1.3 後期サバルタン・スタディーズの変容

1.3.1 スピヴァクの介入（1985）

いわゆる「スピヴァクの介入」により、サバルタン・スタディーズの自覚された方法論のナイーブさが徹底的に見直され、そのスタンスは再定義されることになる。スピヴァクは、4巻に「サバルタン・スタディーズ—歴史叙述を脱構築する」を寄稿した。

そこでスピヴァクは、サバルタン・スタディーズ・グループは（自分たちでは気づかずに）「変化の理論を提供している」と指摘する（Spivak 1985: 330）。サバルタン・スタディーズは、「変化の瞬間は複数的であり、それは移行というより対立として筋書されている」こと、「そうした変化は、記号体系における機能変化によって特徴づけられる」ことを論じたのであった。そして「こうしたパースペクティブの修正あるいは転換のもっとも重要な成果は、反乱者たる『サバルタン』に変化の行為主体性がおかれたこと」であると、スピヴァクはいう（Spivak 1985: 330）。社会変化は、記号体系の変容を伴うのであり、サバルタンは、その行為主体である。このことをスピヴァクは明確に指摘したのである。これは、それまでのサバルタン・スタディーズがサバルタン意識を明らかにするという目的を掲げていたのに対する大きな挑戦でもあった。ここにおいてサバルタン・スタディーズは、その研究対象を静態的な構造から変化の動態へと転換する糸口をつかんだのである。

スピヴァクの介入後、サバルタンは、ある意識を共有する集団であるというよりも、ある特定の歴史的瞬間においてヘゲモニックな記号体系（権力的に決定された意味体系）に対抗する行為主体であると理解されるようになる。スピヴァクは、エリートがヘゲモニックな記号体系を支配しているのに対し、サバルタンは記号体系を反乱の瞬間において変えようとしていると論じる。スピヴァクによると、「記号体系の機能的変化は暴力的出来事である」（Spivak 1985: 331）。この出来事に注目することにより、サバルタン・スタディーズはヘゲモニックな記号体系を再生産するような歴史叙述か

ら免れているというのだ。そして反対に「彼ら自身がヘゲモニックな歴史叙述を危機に陥れている」のだが、このことについて十分に強調できていないと指摘する (Spivak 1985: 332)。サバルタン・スタディーズは、「自分たちの仕事を変化の理論であるというよりも意識か文化の理論であると一般的に認識していた」からである (Spivak 1985: 331)。スピヴァクが指摘するとおり、サバルタン・スタディーズは自覚的な方法論においては不十分であったことは否めない。サバルタン・スタディーズの実際の叙述を魅力的にしていたのは、彼らがサバルタンの意識を明らかにしたからというよりも、現実の歴史的文脈における多元的なプレーヤーのネットワークにおいて、サバルタンが提供する新たなダイナミズムを描いていたからであった。

そのため、スピヴァクはサバルタン・スタディーズに対する自分の解釈は、サバルタン・スタディーズ・グループの「理論的な自己表象の木目に逆らって (against the grain) 読む」ことを試みることであるという (Spivak 1985: 338)。それは、サバルタン意識を描写するという本質主義的なプロジェクトではなく、むしろ意識の歴史的特定性 (specificity) に注意を向けるものであった。

歴史的に特定のサバルタン意識は、グハのいう “negative consciousness” として定義づけられる。negative というのは、サバルタンは本質的にある特定の価値体系をもつというのではなく、常にエリートの見方、つまりエリートがどういう風にサバルタンを位置づけるかという見方に従属せざるを得ないということである。スピヴァクによると、「サバルタン意識は、エリートのカテクシス (「備給」, 心的エネルギーが特定の対象に結び付けられること) に従属している。…ここにあるのは、他者の権力への／の欲望によって自己のイメージが生産されるという反人間主義的で反実証主義的な位置づけである」 (Spivak 1985: 339, カッコ内は田辺による補足)。つまり、エリートの権力的な欲望によってサバルタンの自己イメージはつくられると同時に、サバルタンの側がエリートの権力へ欲望をもつことによって自己のイメージを創造するという側面もあるわけだ。サバルタンは常にエリートからの／への裏返しの意識しかもてないという意味で、サバルタン意識は negative consciousness なのである。

さらにスピヴァクは、サバルタン意識はエリートによる記録をつうじてしか推測できないと指摘する。「闘争についての農民の見方を発掘することはおそらく不可能である」 (Spivak 1988b: 203)。サバルタン研究は歴史研究であり、植民地行政官らが残した反乱の記録などを資料として用いる。グハはそのような記録に反映されているはずのサバルタン意識を読み取ろうとしたのに対し、スピヴァクはそうした植民地行政官のものの見方 (記号体系) によって、サバルタンの声がいかに抑圧されているかに

注意しなければならないと主張するのである。ここでは、サバルタン意識を読み取るのではなく、それがどのように抑圧されているかを読み取るという具合に、議論は逆転されている。スピヴァクは、サバルタンがいかに黙らされてしまうかに注目することにより、彼らの *negative consciousness* を逆光のなかで浮かび上がらせようとするのである。

スピヴァクの指摘によれば、サバルタン・スタディーズは意識しないままに、サバルタンという主体が歴史叙述に立ち上がってくる「主体効果」(subject-effect)を描写している(Spivak 1985: 341)。つまり、「政治、イデオロギー、経済、歴史、セクシュアリティ、言語などの網の目からなる巨大で断続的なネットワーク」において、「これらの網の目の結節点や形状」がいかに「機能する主体という効果をもたらす」のかに注目するわけである(Spivak 1985: 341)。サバルタン・スタディーズは、サバルタンという主体があるといっているのではなく、特定の歴史的瞬間におけるネットワークにおいて、サバルタンという主体効果が立ち現れる状況を歴史的に描くのだ(Spivak 1985: 341-342)。

さまざまな歴史的瞬間には、特定のネットワークがあり、そのネットワークの結節点としてサバルタンが反乱の主体として立ち上がる。それは、もともと主体としてあったものが反乱して立ち上がったのではなく、あるネットワークの特定の動きにおいて、その結節点が反乱の主体であるかのような効果として立ち現れたものである。サバルタン・スタディーズは、そこで立ち現れたサバルタン主体という効果をまるで実体的な主体であるかのように描く。つまりある状況の効果にしか過ぎないものを、その状況を生み出した主体(原因)として描くのである。スピヴァクは、サバルタン・スタディーズを「木目に逆らって」読み、それがサバルタンの主体効果が生まれる状況を描くものであるとする。そして、サバルタンという主体を描くのは、政治的な目的のための「実証主義的本質主義の戦略的利用」とであると解釈しようとするのである(Spivak 1985: 342)。

「実証主義的本質主義の戦略的利用」とは、あくまで研究者の側が、このような主体効果を取りあげることによって、今までの歴史叙述がとらえられなかった変化の瞬間とその行為主体(という効果)に光をあてることを可能にするという意味である。つまり、この言葉は、グローバルな権力状況において、研究者が問題の所在を指し示すための枠組みとして、主体効果であるものを主体の働きとして描く(主体を状況づける)ことが有効であることを指すものである。現在人口に膾炙しているように、アイデンティティ・ポリティクスにおいて、文化=政治集団を実体的な形で構築するこ

とが戦略的本質主義として許される（あるいは政治的に有効である）ということを論じた用語ではないことに注意する必要がある。スピヴァクは、主体の本質主義は避けられないが、それは同時に、常に主体の脱構築と対になっていなければならないと主張する（Spivak and Harasym 1990; Spivak 1990）。

1988年には、エドワード・サイードが緒言を書き、グハとスピヴァクが編者となる形で、*Selected Subaltern Studies* がニューヨークのオクスフォード出版局から発刊された。この本の序章として、スピヴァクがサバルタン・スタディーズの4巻に寄稿した章（Spivak 1985）の縮約版が用いられる。これにより、サバルタン・スタディーズは国際的な影響力をもつようになったが、そこで提出されたサバルタン・スタディーズの姿は、スピヴァクにより再定義されたものであった。

同年の1988年には、有名な論文「サバルタンは語れるか？」“Can the Subaltern speak?”（Spivak 1988a; スピヴァク 1999）が公刊される。そこでスピヴァクは、フーコーとドゥルーズの対談をとりあげる。彼らは表象＝代理は存在しない（誰か別の人の立場を表象＝代理することはありえない）、権力・欲望・利害のネットワークは異種混交的で一貫性はない（一貫した支配・抑圧構造があるわけではない）、理論は実践の中継者である、被抑圧者は自分で語ることができる」と論じている。これに対しスピヴァクは、グローバルな資本の動きやグローバルな分業があってそこにはやはり支配と抑圧の構造があることを彼らは無視している、世界には実際に表象＝代理の作用が存在しているのに思考主体を透明化してそうした作用がないかのようにふるまおうとしている、そして他者の語りを尊重するようで実際には知識人の任務の放棄をしている、と批判する（スピヴァク 1999: 26）。

彼女の批判は、ポスト構造主義における西洋中心主義に対する異議申し立てである。インドのサバルタンという主体効果があることについて、主体効果として現れるサバルタンは常に西洋を中心とする記号体系によって抑圧されていることについて、そしてサバルタンたちはそうした記号体系のなかで自らの声をもてないことについて、どう考えるのかという問いを投げかける。それはポスト構造主義の成果を押さえたうえで、そこにおける安直な表象否定と非一貫性の強調による支配構造の否定について、インドのサバルタンという周縁から問い直そうとするものである。

サバルタンは語ることができるのだろうか？スピヴァクは、「サバルタンは語ることができない」という（スピヴァク 1999: 116）⁷⁾。サバルタンにとって、ヘゲモニックな表象＝代理のシステムのなかでは、声を発することのできる空間はないのである。言い換えると、ヘゲモニックな記号体系である言語において、サバルタンが自ら

について語れる言葉は存在していないということである。

その問題を検討するにあたって、スピヴァクはデリダの議論によりながら、私たちのなかの他者の声である内なる声にうわ言をいわせることが必要であると提案する⁸⁾。そのためには、抑圧されている人たちに耳を傾けたり、彼らにしゃべらそうとしたりするのではなく、むしろ研究者の方が彼らに語りかけるすべを学ばなければならない。そのなかで、われわれが教育を受けたものとして学びとってしまっている記号体系を忘れ去らなければならないと、スピヴァクは論じる(1999: 74)⁹⁾。

1.3.2 後期サバルタン・スタディーズの変容

後期サバルタン・スタディーズは、サバルタンの意識や主体性について語るよりも、フーコー的な知=権力の分析や、サイド的な植民地的言説批判へ向かった。それはスピヴァクが提起した道とも異なるものであった。

その皮切りはチャタジー(1984)であり、彼はエリート主義的ナショナリズムを派生的言説(derivative discourse)として分析した(Chatterjee 1986)。他にも、アーノルドは植民地医療を分析し、生権力(biopower)¹⁰⁾による身体支配を描いた(Arnold 1987)。またパーンデーは植民地的言説によっていかにコミュニズムが構築されたかを分析した(Pandey 1989)。さらにチャクラバルティは、「家庭性」(domesticity)の定義をめぐるエリート男性の議論について論じた(Chakrabarty 1994)。それらの研究においてはどのようなヘゲモニックな記号体系が存在するのか、そしてそれがいかにサバルタンを黙らせているかという議論が主流になり、サバルタンの声を回復しようとする身振りは希薄になっていった¹¹⁾。

2 サバルタン・スタディーズと南アジア人類学をめぐる諸論点

ここからは、サバルタン・スタディーズと南アジア人類学の交流のなかで、さまざまに論じられてきた諸問題をとりあげていく。

2.1 民衆の主体構築の歴史と構造をいかにとらえるか

サバルタンの変容について、初期サバルタン・スタディーズ・グループの魅力的な側面であったサバルタンの声や主体性を回復する試みの魅力が失われ、サバルタン・スタディーズは植民地主義的言説批判の潮流と同じになってしまったのではないかと指摘されるようになった(Sivaramakrishnan 2001: 241)¹²⁾。これは、もしサバルタン・

スタディーズが対抗や抵抗の問題から知＝権力の描写に移行してしまい、サバルタンという主体効果が（ポスト）植民地的な地＝権力の作用の結果であると主張するならば、サバルタン性を語る意味はなくなってしまうのではないかという指摘であった。

その問題に対するひとつの解決策として、シヴァラマクリシュナンは権力作用と主体構築の歴史と構造をとともに見すえた人類学的研究の可能性を提示する（Sivaramakrishnan 2001）。さらに、サバルタン・スタディーズの第4巻に寄稿したバーナード・コーンそしてその弟子のダークスは、歴史学と人類学を接合する歴史人類学の可能性を指摘し、文化の生成過程における国家の権力作用および社会的ネットワークの働きの双方を検討することを提唱する（Cohn and Dirks 1988: 227）¹³⁾。

コーンは、植民地政府のセンサス作成過程をつうじた知＝権力作用に対して、民衆の側がいかに自らの主体の再構築を行ったかを叙述する仕事をしている（Cohn 1987b）。民衆は、政府がセンサスのなかでカースト分類を用いることに対応し、カースト団体を構成し、カーストを単位とする政治的運動を起こす（Carrol 1978）。コーンの議論は、単にカーストやトライブなどのカテゴリーが歴史的に構築されたと指摘するだけにとどまらず、歴史のなかでカーストがいかに植民地支配に用いられ、それが民衆の側の主体構築にどのような影響を与えたのかについて考察する点で重要である。

近年の南アジア人類学においては、文化・社会的カテゴリーの歴史的構築性に注目するのみならず、植民地支配の歴史を踏まえたポスト植民地状況における民衆の視点や実践に着目する研究が顕著である（e.g. Gupta 1998; Sivaramakrishnan 1999; Dirks 2001）。

さらに、日常生活における現代国家の作用についての人類学的研究にも注目すべきであろう（Fuller and Bénéí 2000）。それらの研究は、国家の言説や権力の大きな枠組みに言及しつつ、それらの微細な働きを民族誌的に明らかにしようとする。国家の作用を一枚岩的な記号・言説体系としてとらえるのではなく、実際の村落における日常的な関係性のなかで、いかに国家権力が作用しているのかについて検討する。たとえば、地域社会において土地登記簿を管理する人々がどのような過程をつうじて賄賂を受け取るか、あるいは、村に開発プロジェクトが実行される際に金がどのように分配されるかという民族誌的な描写・分析が行われるようになってきている。

そのような研究においては、関係性のネットワークにおける多元的な交渉過程、および関係性の媒介者としての行為主体^{エージェント}が注目される。そこにおいては、主体の社会的構築性（客体的側面）と行為主体性^{エージェント}（主体的側面）という両側面を、相互排他的に

はなく相互補完的に見ようとしている (Sivaramakrishnan 2001: 241; cf. Ortner 1995)。後期サバルタン・スタディーズは、主体がいかに権力によって構築されるかに注目したが、現在の南アジア人類学は、そうした作用を念頭におきながら、微細な政治・社会ネットワークのなかでの行為主体性^{エージェンシー}にも注目しようとしている。それは、コーンが提唱した歴史人類学の流れを引き継いでいるといえよう。

2.2 「人民＝民衆の国家」形成における文化的想像力の役割について

グハは、サバルタンの意識と主体性を分析することをつうじて、インドにおける民主的国家形成の可能性を検討した。グハによると、インドにおける(ポスト)植民地主義は「ヘゲモニーなき支配」(下からの合意のない裸の権力による支配)であり、エリート・ナショナリストたちもサバルタンの統合に失敗したまま、インド人民全体を代表しようとしたのである (Guha 1989, 1997)。

人民＝民衆の国家の形成はなぜ失敗したのか？ 南アジア人類学の一部はこの問いに答える機能的役割を持っていたと言えるだろう。たとえばデュモンは、インドにおける国民国家形成の失敗を社会的ヒエラルヒーの構造によって説明する (Dumont 1970)。つまり平等な個人が存在しないところでは、国民国家は成立しないというわけだ¹⁴⁾。こうした議論に対して、メンチャーやゴフなどの人類学者たちは、カースト理論は階級イデオロギーに過ぎず (Mencher 1974)、下からの変革は可能であると主張した (Gough 1981)。

グハはサバルタンというカテゴリーを設定しその主体性を主張することによって、いわば論点を前取りする形で、人民によるネーション形成が失敗したのは、そこにサバルタンがいるからだという答えを設定してしまっている。しかし本来グハは、ネーションの形成において人民が主人公になるために、エリート対サバルタンという関係性をいかに解消できるかという問題設定をするべきであったのだろう。

ところがサバルタンの存在をエリートの *negative consciousness* として設定してしまうことによって、国家の支配層エリートがいる限り、その枠組み上、当然ひとつのネーションはありえないことになってしまう。つまり、グハは、人民そのものであるが支配層ではないサバルタンというカテゴリーを設定することにより、人民主体の国家形成の失敗はサバルタンの存在によるという、いわばトートロジーの枠組みをつくってしまっている。サバルタンが従属者である限り、それは支配者との関係においてのみ成立するカテゴリーである。従属者はネーションを担う一貫した文化をもつことはできない。グラムシも、「従属的階級は、定義からして、統一性を欠いている。

そして『国家』になることができるまでは統一的な存在になりえない」と指摘する(上村 1999: 75)。人民主体の国家形成が失敗したのは、サバルタンがサバルタンであり続けたからであり、サバルタンという自律のカテゴリーにこだわる限り、国民国家の自己実現はありえない。

ナショナリズムにおける文化の役割に関する議論は、人類学の議論とも大いに関わる。ケンブリッジ学派は、植民地期の地方政治を人々が権力と富を求めて離合集散する過程としてとらえる(e.g. Seal 1968; Washbrook 1976)。それに対して、サバルタン・スタディーズ・グループは民衆運動を政治の中心に据えようとする。つまり、ケンブリッジ学派が政治を権力闘争の過程としてとらえるのに対し、サバルタン・スタディーズはサバルタン固有の意味や価値の観点から反乱を説明しようとするのである。そのような視点の違いは、東南アジア研究におけるスコットとポップキンの論争を思い起こさせる(Scott 1976; Popkin 1979)。

また国民国家形成の歴史を描くにあたって、ネーションを「想像の共同体」とし文化的な力を重要視するものと、国家の制度、政党、エリートの動きに注目するものとの二つの方向性がある。これは上のケンブリッジ学派とサバルタン・スタディーズの方法論の違いと並行的である。国民国家形成における文化的な契機の重要性については、アンダーソンの「想像の共同体」の議論が有名である(Anderson 1991)。しかし、アンダーソンがネーションは「想像の共同体」であると語る時、その想像にいかほど断絶や抑圧があるかは十分に考慮されていない。実際、インドでも、1960年代においてあれだけ社会運動が活発になったにも関わらず(つまり民衆のネーションに関する想像が国家の提示するネーションの想像とは異なることが公共的に提示されたにも関わらず)、(国民)国家の枠組みは厳然として動かなかった。植民地時代にイギリスが近代領域国家の枠組みとして設立した議会、警察、司法のありかたはポスト植民地インドにおいてもほぼそのまま残り、それを国家の支配層たるエリートが引きついたのである。そこで、民衆がネーションを想像したところで何になるのだろうかという問題が残る。これは政治における文化という契機を重視しようとする人類学的なアプローチにとって重要な問題であろう。

アンダーソンのもうひとつの問題は、植民地状況におけるネーション想像の特有の性格について十分に考慮していないことだ。これもネーション想像における断絶や抑圧の問題のひとつである。たとえば、パルタ・チャタジーはネーションの想像について、植民地状況の視点からひねりを加える(Chatterjee 1986, 1993)。チャタジーは、政治的主権の領域とは別に文化的な主権の領域を設定する。インド人エリートはネー

ションにおける文化的主権の領域（「インドの精神性」）を想像／創造したのであって、欧米のモデルをそのまま模倣したのではない。しかし、「自由・平等」にもとづく政治的主権については欧米の言説枠組みを踏襲し、結局のところ、エリート・ナショナリストの枠組みは欧米からの派生的（*derivative*）なものにとどまった、とチャタジーは指摘する。文化的主権の重要性に関わるチャタジーの指摘は鋭いものであるが、その分析には、エリートの視点からのサバルタン（農民、女性）のネーションにおける位置づけは描かれているものの、サバルタンからの視点はない。そもそもサバルタンはネーションを想像できるのであろうか。

チャタジーは政治社会の分析において、サバルタンは「共同体」の単位を通じて、植民地国家および独立国家に対して「要求の政治」を展開したと論じる（Chatterjee 2004）。そこにおける民衆の政治には、国家および人口はあっても、ネーションはない。サバルタンは、断片にとどまるのである（cf. Chakrabarty 1995）。サバルタンの本質が一貫性のなさや断片性にあるとすれば、サバルタンとはネーションを想像できないものの名であると結論付けざるを得ないのかもしれない。

それにもかかわらず、チャタジー（Chatterjee 1993）やナンディ（Nandy 1983）やガドギル & グハ（Gadgil and Guha 1992）は、資本の論理に回収されない「共同体」の文化を称揚する。そして、インドのネーションの可能性をそうした共同体的伝統に求め続けようとする。サルカール（かつてのサバルタン・スタディーズの同士）は、こうした潮流をロマン主義的であり、ヒンドゥー主義に資するものであると批判する（Sarkar 1997b）。

後期サバルタン・スタディーズにおいては、啓蒙主義的合理主義への批判および植民地主義的言説への批判の潮流が目立つ。こうした反モダニティの言説は、インドにおいて1980年代から興隆したヒンドゥー・ナショナリズムの主張と表面的には重なり合うところが多い。共同体の文化の称揚は、しばしばサバルタン・スタディーズのもつ宗教的価値の称揚と結びついてしまうために、大きな批判を浴びることとなっている。つまり、ヒンドゥー・ナショナリズム優勢のなかで、サバルタン・スタディーズが論じていることは、ヒンドゥー・ナショナリズムにおける植民地批判や近代性批判と変わらないではないかという批判である。

もちろん、チャタジーやナンディはヒンドゥー・ナショナリズムとは政治的にまったく異なる立場にある。彼らは、エリートがというようなセキュラリズムや自由民主主義という形ではなく、民衆が本当に活動できる民主主義を構築しなければならないという問題意識にたって、民衆のもつ文化の政治的な可能性にかけようとしているので

ある。

これに関連してパーンデーは、一元的な宗教アイデンティティを否定し断片を称揚することで、自らの立場を正当化しようとしている (Pandey 1992)。ところが近年のヒンドゥー・ナショナリズムについての研究は、その活動が多面的で状況に応じて弾力的であることを示しており (van der Veer 1994; Hansen 1999; Bhatt 2001; 中島 2005)、サバルタンの断片性や非一貫性を指摘したところで、ヒンドゥー・ナショナリズムとの異同を十分に論じたことにはならない。初期からサバルタンの「宗教性」に注目してきたサバルタン・スタディーズであるが、自らの反合理主義・反リベラリズム・反植民地主義の主張と、ヒンドゥー・ナショナリズムのそれとの違いについて、より周到な議論が必要になってきているといえよう。

現在の政治状況において、政治的な集団構築における文化的想像力の役割に関する人類学的研究は、ますます重要性を帯びているといっていよいだろう。昨今の南アジア人類学においては、「文化の政治性」と「政治の文化性」の双方を視野に入れようとする文化ポリティクス的な視点からの分析が盛んに行われている。たとえば、Cohn (1987a), Dirks (1987, 1992), Gupta (1995), Sundar (1997), Pinney (1997), Fuller and Harriss (2000), Alter (2000), Corbridge and Harris (2000), Appadurai (2004) などがあげられるだろう。

2.3 日常的秩序の変容——主体と経験の変化をいかに描けるか

初期サバルタン・スタディーズは反乱の瞬間を描いたが、後期になると反乱ではなく、いかにヘゲモニックな記号体系によってサバルタンが抑圧されているかについて論じるようになる。後期サバルタン・スタディーズ (の一部) は、植民地テキストなどの分析をつうじて、サバルタン個々人の声ならぬ声を分析するようになった (e.g. Guha 1987)。ここにおいて焦点となっているのはサバルタンの反乱ではなく日常的抵抗 (とその失敗) であるが、南アジア人類学においてもスコットの議論 (Scott 1985) 以降、日常的抵抗は重要なトピックのひとつとなっている (Haynes and Prakash 1991)。人類学の利点は、現代社会においてフィールドワークを行えることであり、それをつうじてひとつの視点からの記録ではなくさまざまな立場からの語りに出会えることであろう。

グハの初期の問題設定であった、なぜ革命 (体制変革) は起こらなかったのかという問いは、人々の日常的抵抗に焦点をあてる議論の発展とともに、別の問いへ移行したようである。新しい問いは、植民地主義および家父長的な支配体制のなかで人々は

いかなる経験をしたか、またそうした経験をつうじて人々は自らの主体あるいは言説をいかに再構築したかというものである。

たとえば、アミンはチャウリー・チャウラーの事件をめぐるさまざまな人々の多様な記憶と語りのあいだの絡み合いを描く (Amin 1995)。その事件では、都市の民衆たちが警察署に放火し、警察官を殺したために、ガンディーは第一次非暴力運動をやめる。従来、その事件に関しては、民衆の大衆心理学の領域で扱われるような、民衆の興奮は抑えられないというような説明が多かった。それに対して、アミンは詳細な資料批判にもとづいて、そこに現れるさまざまな視点の語りを重ね合わせることにより、単に大衆が興奮してガンディーの運動の原理を破ったのではなく、大衆には大衆の論理があったことを明らかにする。

他にも、インド・パキスタン分離独立時の暴力をめぐるパーンデー (Pandey 2001) やブタリア (Butalia 2000) の研究が注目される。ここでは、「戦略的本質主義」という集団設定擁護の言葉の意義が限定的であることが理解される。体制変化あるいは権利主張の政治が必要な場合には、戦略的本質主義はある程度の意味をもちうるだろう。しかし、経験という次元においては、ある人格 (経験の蓄積) が関係性のなかでいかに構築されているかという問題が重要である。政治には体制変化が必要だが、その体制変化は人間 (関係のなかに生きる人々) のためにあるということをわすれてはならない¹⁵⁾。

私も研究者としてではなく、市民として発言をしなければならない場合は、ある集団を擁護するようなこともせざるをえないかもしれない。そして実際にそうしている。しかし、研究者として活動する際には、むしろ特定の瞬間、あるいは特定の体制のなかで人々の経験がどのような関係性のなかで構築されているのか、さまざまな人々の経験がいかにあるのかということをしてできるだけ厚く記述すること、あらゆる政治的決定に伴うジレンマの存在についてよりよく知り人々と共有するということが重要であると思う。

その点で、南アジア人類学のなかで私が共感を覚えるのは、ヴィーナ・ダースの研究である (Das 2006)。1984年のインディラ・ガンディーの暗殺の後、シーク教徒に対する凄惨な暴力と殺戮があった。シーク教徒の多いパンジャブ出身であるダースは、それについて詳細なインタビューを行った。そこにおいては、集団的な出来事と個人的な出来事のあいだに区別はできないこと、すべての出来事は集団的であり、かつ個人的なものであることが指摘される。またダースとインフォーマントの相互行為のなかで、人々が語れないことを語らないままにしようとしたり、あるいは語りえ

ないことを語ろうとしたりする様子が描かれる。それは「サバルタンは語れない」という指摘を超えて、フィールドワークとは、彼（女）らと「人生」を共有し「言葉」を共に紡ぎあげる（あるいは紡ぎあげない）ことであるということを示している。

ダースがサバルタン・スタディーズの第6巻で指摘していることだが、人類学は秩序を描くことを得意とし、構造や体系を描いてきた。南アジア人類学の場合は、それはカーストの「構造」や「体系」などであるが、そこでは個々人の主体性は否定される。初期サバルタン・スタディーズが、サバルタン意識を心性構造として描こうとしたとき、それはサバルタンの集合的な主体性を定立するためのものであったが、同時に個々の経験や主体性を否定することになってしまった。

ただ人類学の構造主義や構造機能主義と違うところは、サバルタン・スタディーズでは反乱という変化の瞬間がとらえられていることであり、そこにおいてサバルタンは自らの歴史の主体であることだ。スピヴァクは、「サバルタン・スタディーズの研究は変化の理論を提供する」といった。そこではサバルタンは、植民地近代における法、医療、官僚制、警察などの支配制度との関連において位置づけられている。つまり、サバルタンのポジションナリティーを植民地政府との関係、司法との関係、警察との関係などにおいてとらえて、植民地統治機構との関係のなかでいかにサバルタン性が構築されているか、いかにサバルタンが反乱の主体となったのかに注目している。それは、自律的な伝統社会の構造のなかにカーストやトライブを位置づけて理解しようとしてきた旧い人類学とは大いに異なるところである（Das 1989）。近代世界におけるより広い制度や権力関係のなかにおいてサバルタンをとらえるということは人類学が学ぶべきことであつたし、実際にサバルタン・スタディーズから人類学が学んだものであつた。

現在の南アジア人類学が、グローバルな経済活動や権力作用の歴史的文脈において地域の人々のありかたを理解しようとしていることは、サイドやコーンそしてサバルタン・スタディーズの影響によるといってよいだろう。

歴史学は、しばしば史料から出来事（対立）を描き、そこに変化の契機を見ようとしてきた。前期サバルタン・スタディーズが農民やトライブ民の反乱に注目したのもそのためである。一方、人類学は、サバルタンが支配体系に対して、いかなる日常的な抵抗や「ずらし」を試みているかについて描くことを得意としてきた（Scott 1985; Haynes and Prakash 1991）。日常生活のなかから、どのように記号体系の機能的変化を伴うような出来事——反乱のような歴史的イベントだけでなく、より小規模な抵抗・対立

の契機などを含む——が起こってくるのか、それが日常的な秩序をいかに変容せしめるのかについて考察することは、人類学と歴史学の共通の理論的課題として残っている。

おわりに——グローバルゼーションとサバルタン

現在のグローバル状況において、サバルタンについて語ることはいかなる意味をもつだろうか。初期のサバルタン・スタディーズの課題であった人民主体のネーション形成という枠組みは、いまや時代遅れになってしまっている部分もある。

今日、サバルタンについて語るということは、大きなグローバル資本主義の流れに棹さすことではないだろうかと自問する必要があるだろう。現在のグローバル状況において、サバルタンの存在は無視されるものであるよりも、むしろ積極的に同定され市場経済に利用されるものとなっている。

たとえば、生物資源についての在来知やゲノムの問題がそうである。ある集団がもっている特定の生物資源についての知識——たとえば薬草についての知識など——を略取しようとしたり、ある特定のゲノムをもつ集団の遺伝資源（genetic resource）を獲得したりすることである。この動きのなかでは、そうした資源や知識をもつ人々をひとつの集団として同定し、彼らに対して一定の弁済をなすことによって、彼らの資源や知識をグローバル資本主義のなかに組み込もうとしている。

こうした状況下で、サバルタンの歴史的主体性を取り戻そうという動きは非常に微妙な意味をもつ。それは、「ネーションの自己実現をめざす」という初期サバルタン・スタディーズ・グループの目指したものは全く異なった意味合いをもちうるのだ。ある集団をサバルタンとして認めるということは、彼らのグローバル資本主義における権利を保障するという問題に還元される。そこでは支払いをなすことがサバルタンとしての主体性を認めるということであり、資源と知識が利用され支払いが終わった後は、もうそのサバルタンの存在はかき消される。

世界におけるさまざまな「サバルタン」の存在が資源や知識の所有権の問題に還元されないように注意する必要がある。つまり、彼らの生き方そのものをいかにわれわれは尊重していけるのかのかを考えなくてはならない。しかもこれまでの人類学のように（あるいは初期サバルタンのように）、サバルタンをある特定の文化をもつひとつの独立した集団として扱って、その静態的な文化を保持することを称揚するのではなく、サバルタンがグローバル・ネットワークのなかで自らの生き方を追求すること

が可能な条件は何かを考えなければならない。サバルタンに注目することの意味は、現在のグローバリゼーションのなかで大きく変わっていることに注意する必要がある。

グローバル市民社会は、サバルタン集団に新たな連帯による^{エージェンシー}行為主体性の可能性を与えるものである一方で (Appadurai 2002), 植民地主義的な civility の押し付けをもたらすものでもありうる (Chatterjee 2004)。そこにおけるサバルタン集団の主体性発揮と抑圧のありかたにも注意を向ける必要がある。

たとえば、アパドゥライは、ムンバイにおける『アライアンス (連帯)』という NGO において、都市のスラム女性、都市のスラム住民の団体、ソーシャル・ワーカーの NGO という三つの集団が協力する様を描く。その連帯をつうじてアライアンスは、グローバル・ネットワークから資金や技術を獲得しつつ、当事者であるスラムの女性や住民の声を活かそうとしている。これはそれぞれの差異を尊重しながら連帯をするというグローバル市民社会の新たな形として注目されるアパドゥライは主張する (Appadurai 2002)。

他方、チャタジーは、グローバル市民社会の恩恵にあずかるのは都市の住民だけで、アパドゥライが描くようなスラム女性の市民社会への参加は、インドにおいて実は非常にまれであると指摘する (Chatterjee 1998a, 2000)。現代インドの状況では、サバルタンは多くの場合、グローバル市民社会へのアクセスがない。彼らにできることは共同体として、国家に対して要求の政治をなしていくことである。チャタジーは、グローバル近代からはずれた諸人口集団が国民国家に対して展開する「被統治者の政治」に焦点をあて、その例としてカルカッタにおける不法占拠者の共同体が政治主体として立ち上がっていく様子を描いている (Chatterjee 1998a, 1998b, 2004)。

現在、インドがグローバル経済のなかで著しい発展を遂げていくなか、国家の税収は着実に増大している。現在の南アジア農村においては、国家がグローバル経済から得た富を地方自治体や「政府管理の NGO」をつうじて再分配することが、政治経済的に非常に重要な意味をもってきている。国家は開発や貧困削減のプロジェクトの名のもとで巨額の予算を農村に投入しているのである。これは 1991 年の経済自由化と 1992 年の地方自治体改革による分権化によって可能となった。ここにおいて、農村社会における支配と従属の形は大きく変容しつつあり、その姿をとらえることは南アジア人類学にとって重要な研究課題になっている。

地方自治体改革の結果、自治体の議席には留保枠として、指定カースト民 (いわゆる不可触民とされた低カースト) と指定トライブ民には人口比に応じて議席が与えら

れ、また女性には三分の一の議席が与えられるようになった。それは、地方政治において彼（女）らの発言権が保証されることを意味する。これはグハが目指したような本来のひとつのネーションをつくるという課題設定とは異なり、むしろ社会における多元的な集団の存在を認め、それらの政治参加を進めるという民主化の方向性である。つまりネーションを作り上げ、それを民主主義の主体とするナショナル・デモクラシーの枠組みを目指すのではなく、社会の多元性を認めながらそれらの民主的な協力を可能にするような「ヴァナキュラー・デモクラシー」を作り上げようとする試みがここにはあると考えられる（Tanabe 2007）。

ただしそこにおいても、女性、指定カースト民、指定トライブ民は差異に応じて発言権を保証されているのであり、誰に対してどのように政治的参加権を付与していくのかという古くて新しい問題が生じる。つまり、サバルタンとは誰であるのか、サバルタンをいかに政治に参入させていくのかというグハの問いは、現在でもはっきりとした政治的妥当性を有しているのである。

注

- 1) オクスフォード大学出版局からパーマメント・ブラックへと出版元を移したのは、前者の学術部の中心的な編集者であったルクン・アドヴァーニーが、オクスフォード大学出版局から不本意な形で退職を余儀なくされ、自らの出版社であるパーマメント・ブラックを立ち上げたことと関わっている。
- 2) サバルタン・スタディーズおよびサバルタン・スタディーズ関連の詳細な文献リストについては、<http://www.lib.virginia.edu/area-studies/subaltern/ssmap.htm> を参照のこと。
- 3) なお「受動的革命」も、もともとはグラムシの用語であり、革命が起こったフランス以外のヨーロッパ諸国において、旧封建貴族が存続し、新興ブルジョワと貴族層の妥協が成立したことを指す。この過程において、民衆の参加はなかった（Gramsci 1971: 114-115, 118-120）。
- 4) 中間的な存在があるということ、サバルタンは関係的にのみ定義できるということは、やはり認識論的な問題として異なるスタンスである。いずれにせよグハが社会政治的文脈に注意深くあろうとしたことは間違いない。
- 5) サバルタン・スタディーズの学説史的背景については、長崎（1987）および粟屋（1988）が適切で優れた解説を行っている。
- 6) それは後に触れる昨今のコミュニズムや宗派対立をめぐる議論において、サバルタン研究が批判にさらされるゆえんでもある。つまり、サバルタン・スタディーズは宗教性をサバルタン意識として称揚しすぎたのではないかという批判である。
- 7) ただしこの点について、スピヴァクは後のインタビューなどで、サバルタンの行為主体性を否定するつもりはなく、ただどのように彼らが声を抑圧され、非常に特殊な形でしか自らの立場を表現できないか（「サバルタンは語れるか」論文における自殺の例のように）について議論したかったのだと釈明している（Spivak 1990）。
- 8) スピヴァクは、「思考とは…テキストの空白部分である」というデリダの言葉を引用する。そして「テキストに書きこまれた空白」が「理論の生産の唯一の場所」であり、そこにアプローチしようとするのだ。「デリダが『他者（たち）に自分で語らせる』ことを求めず、むしろ、『まったき他者』（自己を打ち固めるための他者とは対立する関係にあるものとしての tout-autre）への『呼びかけ』を行って、『わたしたちのなかの他者の声である内なる声』にう

- わ言をいわせる』ことをもとめている」(スピヴァク 1999: 70)。
- 9) 「サバルタンの女性という歴史的に沈黙させられてきた主体に(耳を傾けたり、代わって語るといふよりは)語りかけるすべを学び知ろうと努めるなかで、ポストコロニアルの知識人はみずから学び知った女性であることの特権をわざと『忘れ去ってみる (unlearn)』」(スピヴァク 1999: 74)。
 - 10) 「生権力」とはフーコーが用いた用語であり、生命に対して作用する権力を指す(フーコー 1986)。フーコーは、近代国家が政治の中心に生命を置き、個々の身体のレベルおよび人口集団のレベルにおいて生命を統御しようとする権力作用に注目した。
 - 11) 後期サバルタンについてより詳しくは、粟屋(1999)や井坂(2002)などの優れた論考があるので、そちらをご参照いただきたい。また興味深い評言として粟屋(1996)や白田(1997)もある。なおサバルタンに関する評論は数多いが、たとえば、オハンロン(O'Hanlon 1988)、ベイリー(Bayly 1988)、サルカール(Sarkar 1997a)、マッセロス(Masselos 1992)、当事者からの反論あるいは弁明としてパーンデー(Pandey 1995)とブラカーシュ(Prakash 1994)をあげておく。また、南アジア史研究の枠組みに関わるものとしては、ブラカーシュとオハンロン&ウォシユブルクとの論争が興味深い(Prakash 1990, 1992; O'Hanlon and Washbrook 1992)。
 - 12) 後期サバルタン・スタディーズにおけるサバルタンの不在については、他にもサルカール(Sarkar 1997a)などが指摘している。
 - 13) つまり「小規模なネットワークおよび国家の正当化プロジェクトの双方を通じて、文化がいかに生産され、統御され、変容され、再生産されるか」について研究するということである(Cohn and Dirks 1988: 227)。
 - 14) デュモンは、インドにおけるコミュニズム(宗派主義)の存在についても、伝統社会から近代社会への移行状況の問題として説明している(Dumont 1964)。
 - 15) スピヴァクは次のようにいう。「結局、すべての政治的な仕事は人間のためであるということに信じてはいけません。体制の変化ということ——もちろんそれは大事なことだけ——だけにとらわれずに、これらの変化がそれを適用し、保証し、他の人々をみて彼らを将来助けたいと思うような人々のためであるならば、組織者はこれらの人々に対して、単に政治的变化のための後援者(有権者)としてでなく、彼らが人間となれるようなやりかたで接しなくてはなりません」(Spivak 1990: 91)。

文 献

サバルタン・スタディーズ・シリーズ

- Ranjit Guha, ed. *Subaltern Studies I: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1982. 231 p.
- Subaltern Studies II: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1983. 358 p.
- Subaltern Studies III: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1984. 327 p.
- Subaltern Studies IV: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1985. 383 p.
- Subaltern Studies V: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1987. 296 p.
- Subaltern Studies VI: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1989. 335 p.
- Partha Chatterjee and Gyanendra Pandey, eds. *Subaltern Studies VII: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1992. 272 p.
- David Arnold and David Hardiman, eds. *Subaltern Studies VIII: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1994. 240 p.
- Shahid Amin and Dipesh Chakrabarty, eds. *Subaltern Studies IX: Writings on South Asian History and Society*. New Delhi: Oxford University Press India, 1996. 248 p.
- Gautam Bhadra, Gyan Prakash, and Susie Tharu, ed. *Subaltern Studies X: Writings on South Asian*

- History and Society*. New Delhi: Oxford University Press, 1999. 252 p.
 Partha Chatterjee and Pradeep Jeganathan, ed. *Subaltern Studies XI: Community, Gender and Violence*. New York: Columbia University Press, 2000 (Permanent Black). 347 p.
 Shail Mayaram, M. S. S. Pandian, and Ajay Skaria, ed. *Subaltern Studies XII: Muslims, Dalits and the Fabrications of History*. New Delhi: Permanent Black and Ravi Dayal Publisher, 2005. 322 p

日本語文献

- 粟屋利江
 1988 「インド近代史研究にみられる新潮流——「サバルタン研究グループ」をめぐって」『史学雑誌』97(11): 81-89。
 1996 「『サバルタン研究』再考——インド近代へのまなざし」『創文』5月号。
 1999 「『サバルタン・スタディーズ』の軌跡とスピヴァクの〈介入〉」『現代思想』27(8): 211-225。
- 井坂理穂
 2002 「サバルタン研究と南アジア」長崎暢子編『現代南アジア1 地域研究への招待』東京：東京大学出版会。
- 白田雅之
 1997 「サバルタンとは誰か——関係的カテゴリーを目指して」『創文』6月号。
- 上村忠男
 1999 「戦略としての歴史叙述：歴史のヘテロロジーのために(5)」『思想』900: 55-80。
- 崎山政毅
 1996 「文体に抗する「文体」——サバルタン研究の批判的再考のための覚書」『思想』866: 146-177。
- シュヴァラマクリシュナン, K.
 1995 「サバルタン研究と人類学的言説」(井口由布・長原豊訳)『aala』100号, 日本アジア・アフリカ作家会議。
- スピヴァク, G. C.
 1999 『サバルタンは語るができるか』上村忠男訳, 東京：みすず書房。
- 長崎暢子
 1987 「『サバルタン・スタディ』グループの研究について——インドにおける歴史研究の新しい傾向」『東京・教養学科紀要』第20号。
- 中島岳志
 2005 『ナショナリズムと宗教——現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』神奈川：春風社。
- フーコー, ミシェル
 1986 『性の歴史1 知への意志』渡辺守章訳, 東京：新潮社。

外国語文献

- Alter, J. S.
 2000 *Gandhi's Body: Sex, Diet, and the Politics of Nationalism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Amin, S.
 1984 Gandhi as Mahatma: Gorakhpur District, Eastern UP, 1921-1912. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies III: Writings on South Asian History and Society*, pp. 1-61. New Delhi: Oxford University Press.
 1995 *Event, Memory, Metaphor: Chauri Chaura, 1922-1992*. New Delhi: Oxford University Press.
- Anderson, B.
 1991 [1983] *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 2nd ed. London: Verso.

- Appadurai, A.
2002 Deep Democracy: Urban Governmentality and the Horizon of Politics. *Public Culture* 14(1): 21–47.
2004 The Capacity to Aspire: Culture and Terms of Recognition. In V. Rao & M. Walton (eds.) *Culture and public action*, pp. 59–84. Stanford, Calif.: Stanford Social Sciences.
- Arnold, D.
1987 Touching the Body: Perspectives on the Indian Plague, 1896–1900. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies V: Writings on South Asian History and Society*, pp. 55–90. New Delhi: Oxford University Press.
- Bayly, C. A.
1988 Rallying around the Subaltern. *Journal of Peasant Studies* 16(1): 110–125.
- Bhatt, C.
2001 *Hindu Nationalism: Origins, Ideologies and Modern Myths*. Oxford: Berg.
- Butalia, U.
2000 *The Other Side of Silence: Voices from the Partition of India*. New Delhi: Penguin Books.
- Carrol, L.
1978 Colonial Perceptions of Indian Society and the Emergence of Caste(s) Associations. *Journal of Asian Studies* 37(2): 233–250.
- Chakrabarty, D.
1994 The Difference-Deferral of a Colonial Modernity: Public Debates on Domesticity in British Bengal. In D. Arnold & D. Hardiman (eds.) *Subaltern Studies VIII: Writings on South Asian History and Society*, pp. 50–88. New Delhi: Oxford University Press.
1995 Radical Histories and Question of Enlightenment Rationalism: Some Recent Critiques of Subaltern Studies. *Economic and Political Weekly* 30(14): 751–760.
- Chatterjee, P.
1982 Agrarian Relations and Communalism in Bengal, 1926–1935. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies I: Writings on South Asian History and Society*, pp. 9–38. New Delhi: Oxford University Press.
1984 Gandhi and the Critique of Civil Society. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies III: Writings on South Asian History and Society*, pp. 153–195. New Delhi: Oxford University Press.
1986 *Nationalist Thought and the Colonial World*. London: Zed Books.
1993 *The Nation and its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press.
1998a Beyond the Nation? Or Within? *Social Text* 16(3): 57–69.
1998b Community in the East. *Economic and Political Weekly* 33: 277–282.
2000 Two Poets and Death: On Civil and Political Society in the Non-Christian World. In T. Mitchel (ed.) *Questions of Modernity*, pp. 35–48. Minneapolis, London: University of Minnesota Press.
2004 *The Politics of the Governed: Reflections on Popular Politics in Most of the World*. New York: Columbia University Press.
- Cohn, B. and N. B. Dirks
1988 Beyond the Fringe: The Nation-State, Colonialism and the Technologies of Power. *Journal of Historical Sociology* 1(2): 224–229.
- Cohn, B. S.
1987a *An Anthropologist among the Historians and Other Essays*. New Delhi: Oxford University Press.
1987b The Census, Social Structure and Objectification in South Asia. In *An Anthropologist among the Historians and Other Essays*, pp. 224–254. Oxford: Oxford University Press.
- Corbridge, S. and J. Harriss
2000 *Reinventing India: Liberalization, Hindu Nationalism and Popular Democracy*. New Delhi: Oxford University Press.
- Das, V.
1989 Subaltern as perspective. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies VI: Writings on South Asian History and Society*, pp. 310–324. New Delhi: Oxford University Press.

- 2006 *Life and Words: Violence and the Descent into the Ordinary*. Berkeley: University of California Press.
- Dirks, N. B.
 1987 *The Hollow Crown: Ethnohistory of an Indian Little Kingdom*. Cambridge: Cambridge University Press.
 1992 Castes of Mind. *Representations* 37: 56–78.
 2001 *Castes of Mind: Colonialism and the Making of Modern India*. Princeton: Princeton University Press.
- Dumont, L.
 1964 Nationalism and Communalism. *Contribution to Indian Sociology* 7: 30–70.
 1970 *Homo Hierarchicus: The Caste System and Its Implications*. Chicago: Chicago University Press.
- Fuller, C. J. and V. Bénéï (eds.)
 2000 *The Everyday State and Society in Modern India*. New Delhi: Social Science Press.
- Fuller, C. J. and J. Harriss
 2000 For an Anthropology of the Modern Indian State. In C. J. Fuller and V. Bénéï (eds.) *The Everyday State and Society in Modern India*, pp. 1–30. New Delhi: Social Science Press.
- Gadgil, M. and R. Guha
 1992 *This Fissured Land: An Ecological History of India*. New Delhi: Oxford University Press.
- Gough, E. K.
 1981 *Rural Society in Southeast India*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gramsci, A.
 1971 *Selections from the Prison Notebooks*. translated by Q. Hoare and S. G. Nowell. London: Lawrence and Wishart.
- Guha, R.
 1982a On Some Aspects of the Historiography of Colonial India. In *Subaltern Studies I: Writings on South Asian History and Society*, pp. 1–8. New Delhi: Oxford University Press.
 1982b Preface. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies I: Writings on South Asian History and Society*, pp. vii–viii. New Delhi: Oxford University Press.
 1983 *Elementary Aspect of Peasant Insurgency in Colonial India*. New Delhi: Oxford University Press.
 1987 Chandra's Death. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies V: Writings on South Asian History and Society*, pp. 135–165. New Delhi: Oxford University Press.
 1989 Dominance without Hegemony and its Historiography. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies VI: Writings on South Asian History and Society*, pp. 210–309. New Delhi: Oxford University Press.
 1997 *Dominance Without Hegemony: History and Power in Colonial India*. Boston: Harvard University Press.
- Gupta, A.
 1995 Blurred Boundaries: The Discourse of Corruption, the Culture of Politics, and the Imagined State. *American Ethnologist* 22(2): 375–402.
 1998 *Postcolonial Developments: Agriculture in the Making of Modern India*. Durham, N.C.: Duke University Press.
- Hansen, T. B.
 1999 *The Saffron Wave: Democracy and Hindu nationalism in Modern India*. Princeton: Princeton University Press.
- Hardiman, D.
 1984 Adivasi assertion in South Gujarat: the Devi Movement of 1922-3. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies III: Writings on South Asian History and Society*, pp. 196–230. New Delhi: Oxford University Press.
 1987 *The Coming of the Devi: Adivasi Assertion in Western India*. New Delhi: Oxford University Press.
- Haynes, D. E. and G. Prakash
 1991 *Contesting Power: Resistance and Everyday Social Relations in South Asia*. New Delhi:

- Oxford University Press.
- Kaviraj, S.
1988 A Critique of the Passive Revolution. *Economic and Political Weekly* 23(27): 2429–2443.
- Kothari, R.
1964 The Congress ‘System’ in India. *Asian Survey* 4(12): 1161–1173.
1974 The Congress System Revisited: A Decennial Review. *Asian Survey* 14(12): 1035–1054.
1994 *Politics in India*. Orient Longman.
- Masselos, J.
1992 The Dis/Appearance of Subalterns: A Reading of a Decade of Subaltern Studies. *South Asia: Journal of South Asian Studies* 15(1): 105–125.
- Mencher, J. P.
1974 The Caste System Upside Down, or the Not-so-mysterious East. *Current Anthropology* 15: 469–478.
- Nandy, A.
1983 *Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism*. New Delhi: Oxford University Press.
- O’Hanlon, R.
1988 Recovering the Subject in Subaltern Studies and Histories of Resistance in Colonial South Asia. *Modern Asian Studies* 22(1): 189–224.
- O’Hanlon, R. & D. Washbrook
1992 After Orientalism: Culture, Criticism and Politics in the Third World. *Comparative Studies in Society and History* 34(1): 141–167.
- Ortner, S. B.
1995 Resistance and the Problem of Ethnographic Refusal. *Comparative Studies in Society and History* 37(1): 173–193.
- Pandey, G.
1989 The Colonial Construction of ‘Communalism’: British Writings on Banaras in the Nineteenth Century. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies VI: Writings on South Asian History and Society*, pp. 132–168. New Delhi: Oxford University Press.
1992 In Defense of the Fragment: Writing about Hindu-Muslim Riots in India Today. *Representations* 37: 27–55.
1995 Voices from the Edge: The Struggle to Write Subaltern Histories. *Ethnos* 60(3-4): 223–242.
2001 *Remembering Partition: Violence, Nationalism, and History in India*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pinney, C.
1997 The Nation (Un)pictured? Chromolithography and ‘Popular’ Politics in India, 1878–1995. *Critical Enquiry* 23: 843–867.
- Popkin, S. L.
1979 *The Rational Peasant: The Political Economy of Rural Society in Vietnam*. University of California Press.
- Prakash, G.
1990 Writing Post-Orientalist Histories of the Third World: Perspectives from Indian Historiography. *Comparative Studies in Society and History* 32(2): 383–408.
1992 Can the ‘Subaltern’ Ride? A Reply to O’Hanlon and Washbrook. *Comparative Studies in Society and History* 34(2): 168–184.
1994 Subaltern Studies as Postcolonial Criticism. *The American Historical Review* 99(5): 1475–1490.
- Sarkar, S.
1997a The Decline of the Subaltern in Subaltern Studies. In *Writing Social History*, pp. 82–108. New Delhi: Oxford University Press.
1997b *Writing Social History*. New Delhi: Oxford University Press.
- Scott, J. C.
1976 *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven, London: Yale University Press.

- 1985 *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.
- Seal, A.
1968 *The Emergence of Indian Nationalism: Competition and Collaboration in the Later Nineteenth Century*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sivaramakrishnan, K.
1999 *Modern Forests: Statemaking and Environmental Change in Colonial Eastern India*. Stanford: Stanford University Press.
2001 Situating the Subaltern: History and Anthropology in the Subaltern Studies Project. In D. Ludden (ed.) *Reading Subaltern Studies: Critical History, Contested Meaning, and the Globalisation of South Asia*, pp. 212–255. New Delhi: Permanent Black.
- Spivak, G. C.
1985 Subaltern Studies: Deconstructing Historiography. In R. Guha (ed.) *Subaltern Studies IV: Writings on South Asian History and Society*, pp. 330–363. New Delhi: Oxford University Press.
1988a Can the Subaltern Speak? In C. Nelson and L. Grossberg (eds.) *Marxism and the Interpretation of Culture*, pp. 271–313. Urbana: University of Illinois Press.
1988b *In Other Worlds: Essays in Cultural Politics*. New York: Routledge.
1990 Gayatri Spivak on the Politics of the Subaltern, interview by Howard Winant. *Socialist Review* 20(3): 85–97.
- Spivak, G. C. and S. Harasym
1990 *The Post-Colonial Critic: Interviews, Strategies, Dialogues*. Routledge.
- Sundar, N.
1997 *Subalterns and Sovereigns: An Anthropological History of Bastar, 1854–1996*. New Delhi: Oxford University Press.
- Tanabe, A.
2007 Toward Vernacular Democracy: Moral Society and Post-postcolonial Transformation in Rural Orissa, India. *American Ethnologist* 34(3): 558–574.
- van der Veer, P.
1994 *Religious Nationalism: Hindus and Muslims in India*. Berkeley: University of California Press.
- Washbrook, D.
1976 *The Emergence of Provincial Politics: the Madras Presidency, 1870–1920*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yadav, Y.
2000 Understanding the Second Democratic Upsurge: Trends of Bahujan Participation in Electoral Politics in the 1990s. In F. R. Frankel, Z. Hasan, R. Bhargava and B. Arora (eds.) *Transforming India: Social and Political Dynamics of Democracy*, pp. 120–145. New Delhi: Oxford University Press.